

たより 「美紗の会」 ニユース 第42号

西松布咏

夕暮れに眺め見渡す隅田川
一面川を渡る風の冷たさ
茜色から薄渡る紅葉へと移りゆく空
の寂しさ。そんな宵の情景は
人々と伝える手に続く哀調を
帯びた「夕暮れ」から始まつた
と第六回六翔巣のレ
ポートを送つて下さった積木
ハウス企画室の堀江さん。ろ
うそくの灯に照らし出される
は細い、うな撫で肩を禮と
感を目と耳との両方から堪能
させていただきました……と
その長い文章は過分なお褒め
の言葉で締められていた。私の
この秋の旅は名古屋から始
まつた。編集工学所長松岡正
剛氏のよどみのない深い声
波が名古屋駅に隣接した空に
そえられたセントラルタワーの
一室にひろがり、心地良い夢の
のうすな江戸の粋と遊びにあ
ふれた講座のゲストを務めさ
せていただいた。そしてほど
なく十一月二日は築城四百年
祭でわき立つ松山城守閣での
コンサート。闇の中にはご
めく先人の望儂の声を背後に
感じながら唄つた感激も覚め
せていただいた。そしてほど
なく十一月二日は築城四百年
祭でわき立つ松山城守閣での
コンサート。闇の中にはご
めく先人の望儂の声を背後に
感じながら唄つた感激も覚め
やさしく包んでくれた。
そして文化の名の鎌倉での
コンサートも盛況のうちに終
えることが出来た。五日はソ
ルト氏が昨年来楽しみにして

いる舞踏家大野一雄スタジオの特別レクチャーや、私も又三味線特習参で、ソルト氏の吹聴の開始に参加した。いつものように慶人先生を中心の家族団欒の仲間入りをさせていただきくつろいだ後、スタジオでレッスンの開始。ソルト氏の呪文のような言葉のイメージで触発されるように生徒が瞑想しながら思いい思いのボーズで舞踏する。いつしか私達の横で椅子の大野一雄先生が拳を強く握り宇宙を広げてゆく。そこには何ものにも捕らわれない人間本来の生きる歓び。エネルギーが魂となって浮遊してゆく。学習というのは、見えるもの触れること聞こえてくるものを通じて頭を使つて学習すること以上に見えないものと見えることの出来ない人生と死の問題について学ぶといった宇宙論についての魂の学習をやってゆきたい。いつかおしゃりやっていた一雄先生の言葉を思い出し私の声もいつしか大きく解き放たれたた欲びに満ち／＼ていった感動の夜だった。そしていよいよ十五日の昼過ぎに飛行機で徳島に飛んだ。すぐにはカフェロザの会場で打ち合わせの後、車に乗ると早あたりは暮れ夕闇と寒さが、原田邸が包んでいた。玄関に入るときの中であまりに多勢の方々が忙しく動いているので、びっくり!!江戸末期に建てられた屋敷は、座布団が次々と運ばれて花が生けられ、舞台や受付が作られ、着々と準備が整つてゆく。

「時間は常に留まることが無くなる」。それで「今は悪いけれど、いざれば善く捨てた」。出家者の心なのか、「上へ西行」が「下へ西行」とは、どうしてこれ考えませんか?」「ソラノ」の写真を見ながら、「私がここへ行つた時、昔は立派な宮殿が覆いかぶさるように、巨大な樹が根を張り抜け、枝を抜け、そのままかれわらぎ、輪廻と云ふ考え方があります。それが、このところは、今度生まれる様子を見ました。仏教では、それが、このまま生き残る時になると、かわる時は人間になるよりも、かういう树になつる方がしがいがあるかもしれません。でも、それでも、生き残る時は、必ず生き残りますが、決めるのは、今の人で、そこには、時間が直線的進歩していくのと、それとがちです。でも、そこには、時間が圓環的で繰返し返してゆくとみる文化もあります。」

「昔江戸の遊廓では遊女はお客さまとお座敷で羽織を着てはいたけれど、いまでは羽織を着てはいけない。なぜなら辰巳の若者たちは、遊女の人生をいじめたり、罵りをかけたりしてしまった。だから、お客さまが一方の誇りをもつて、遊女たちを罵る。つまり同じく羽織を着てはいけない。これが、もてなすに困る。それで冬でも心寒気臭をあらわす花の原作の町で、太鼓末社や御取りり巻きで浮いた浮いたで通わんせよ。花アゲイでお待ちかね」と、花アゲイがお待ちかねのお客だ。

平成十四年十二月二十五日

発行者
「美紗の会」
☎03-3441-2726
編集責任者
大久保朋子

一唄で綴る日本の美学

三
重

三

雪やとけぬらん

L

